

琉球大学学術リポジトリ

[記事](研究発表会要旨)パイナップルピンク病果実の
安全性評価について

メタデータ	言語: 出版者: 南方資源利用技術研究会 公開日: 2014-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 徳元, 正和, 比嘉, 永彦, 福田, 亘博 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002017316

パイナップルピンク病果実の安全性評価について

沖縄県農業試験場

○徳元正和

(財) 地域産業技術振興協会 比嘉永彦

宮崎大学農学部

福田亘博

1. はじめに

パイナップル缶詰の果肉褐変現象は一般的にピンク病と呼ばれ、果肉が褐色もしくはピンク色に変色する。しかし、生のピンク病果実は正常果との判別がつきにくく、病果は缶にパックした後、殺菌のための加熱工程で発色するため、汚染缶は消費者段階で発見されるのが通常である。ピンク病はバクテリアに起因し圃場において感染・発病すると考えられるが、発生時期に特徴があり、2～4月頃に集中的に発生し他の時期の発生はほとんど見られない。

一般消費者向けの小型缶では病果を食する可能性は低いと考えられるが、業務用大型缶（ピーセス等）やジュース等での混入では利用時に見逃される可能性もあり、それらの製品を取り扱う業者から安全性確認に対する要望がパッカーに出されてきた。また、生のままでは正常果との判別のつかないピンク病果実が生食用として出荷され、食されたときの影響も懸念された。しかし、パインピンク病果実に関する安全性評価のデータがないため、今回はピンク病果実をマウスに摂取させその影響について調べた。

2. 方法

パインピンク病果実のクラッシュを調整し、凍結乾燥で濃縮した後、加熱処理及び無処理の濃縮物を合成飼料に各濃度ごとに添加し飼料とした。マウスは系統Rbt:lekの5週齢をもちいた。飼料の摂取期間中は生死、運動、血色、排拙物等の一般的観察とともに体重変化、餌の摂取量変化を調べた。病果摂取試験後、マウスはすべて解剖し、各組織の形態をみるとともに、各臓器重量の測定をおこない、また、血液および肝臓の生化学的性状についても調べた。

3. 結果

摂取試験期間中のマウス死亡例は無く、運動能や排せつ物等にも各群での異常は観察されなかった。また、外部から認められる症状（麻痺、興奮、震せん、けいれん等）は皆無であった。餌摂取量における各群間の有意差は認められず体重増加量についても同様であった。各臓器重量における各群間の有意差は認められず外観的な変化も認められなかった。また、血清の生化学的性状におけるGOT、GPT、血糖値、TG、コレステロール値に、対照区との有意差は認められず、肝臓のリン脂質、TG、コレステロール、グリコーゲン値においても同様であった。